

大阪府動物愛護管理センターにおけるイヌの行動特性と譲渡による変化

若井 優依奈

本研究では大阪府動物愛護管理センター（以下、センター）にて保護されているイヌ（*Canis lupus familiaris*）24 頭と、センターから新しい飼い主に譲渡され1年以上経過したイヌ 9 頭を対象に、行動観察と眼球温度の測定を行い、各個体の特性を行動学的に評価した。さらに、その特性と物体選択課題の正答率との関連や、一般家庭への譲渡という環境の変化が個体のストレスや行動に与える影響を検討した。

まずセンターのイヌを対象に、体の大きさ、性別、年齢およびケージ内の日常的な場面における行動と、サーモグラフィーカメラ(testo 社製 testo883-1)を用いて測定した眼球温度との関連を検討した。2024 年 4 月 9 日から 11 月 19 日まで計 25 日間観察を行い、行動および眼球温度が測定できた 1168 サンプルを解析に使用した。年齢が若いほど、メスよりもオスの方が、またイヌの尾の動きが速く、ケージの中での位置がヒトに近く、パンティングをしているときほど、温度が高いことが示され、眼球温度が興奮や覚醒の指標として利用できるという先行研究の知見を支持する結果となった。

センターのイヌ($N = 24$)がヒト(スタッフや獣医師)と関わった際の反応を調べ、その個体差を定量的に評価した。ヒトとの関わり度合いが大きい時ほど眼球温度は高く、伏せる姿勢から立ち姿勢になり、尾の位置は高く、尾の動きは速くなり、ケージ内での位置がヒトに近づいた。また、ヒトとの関わり度合いが大きいほど、吠える行動、クーンと鼻で鳴く行動、口腔行動が増加した。観察した 5 つの行動項目と眼球温度に対して、ヒトとの関わり度合いが大きい時と小さい時の値の差分をとってヒトへの反応性を評価し、主成分分析を行った。結果、ヒトとの関わりによってクーンと鼻で鳴く、吠える行動、立ち姿勢やヒトの近くにいることが増加する「動作の活発さ」の成分(寄与率:37.2%)と、ヒトとの関わりによって尾の位置が低くなる効果と、眼球温度が高くなる効果を合成した成分である「緊張度」(25.7%)という 2 つの主成分が抽出された。

イヌは家畜動物として長い歴史を持ち、人類の最古の友と言われる。イヌはヒトの視線や指差しといった社会的シグナルを利用する能力を持つことが知られている。本研究では指差しテスト(Udell et al., 2008)を実施し、センターのイヌの正答率が上述のヒトへの反応性の個体差によって予測できるかどうか検討した。「動作の活発さ」は正答率を説明できなかったが、「緊張度」は正答率に対して有意な負の効果を持っていた。以上から、ヒトに対する緊張度の低い個体は、ヒトと関わる経験の中でより効果的にヒトの社会的シグナルを学習している可能性と、テスト実施時にストレスを感じにくく、イヌが有する社会的認知能力が発揮されやすかった可能性が考えられた。

センターのイヌ($N = 5$)の指差しテストの正答率(平均 34.0%)は偶然(50%)の範囲内であったが、譲渡後 1 年以上経過したイヌ($N = 9$)は、統計的に偶然以上の確率(63.3%)で正答を選択することができた。先行研究によると、イヌの成績はヒトとの信頼関係によって変化する。譲渡後のイヌは、飼い主に対する信頼感の向上や緊張度の低下が生じ、ヒトの社会的シグナルを適切に利用できた可能性を考察した。

日本のイヌの保護施設において、一般家庭への適切な譲渡を促進することが課題である。本研究では観察期間中に 15 頭の対象個体の譲渡が成立した。そこで、センターに保護されてから譲渡成立までの日数が、対象個体の属性や行動特性から説明できるか検討した。年齢や性別、体の大きさといった個体属性、ケージ内での行動、動作の活発さや緊張度といった主成分得点などの行動特性からは、譲渡成立までの日数を統計的に説明することはできなかった。新しい飼い主が引き受けるイヌを決める際の理由として、「顔写真を見てピンと来た」、「亡くなった先住犬と似ていて一目惚れした」などがあり、本研究が扱った個体特性とは異なる特徴で判断されている可能性が示唆された。(比較行動学)